

復活節第六主日

2011.5.29

ヨハネ 14 : 15-21

今日の福音も先週の日曜日に聴いた、十字架の死を前にしたイエスの、弟子たちへの最後のおことばの続きです。

ヨハネ福音書には、最後の晩餐の席でイエスが弟子たちに語られた、多くのおことばが収められています。聖書の解説書を開いてみると、最後の晩餐のイエスのこれらのおことばは「告別説教」という風に言われています。これらの、いわゆる「告別説教」の中のイエスのおことばは、ヨハネ福音書だけであって、他の福音書の中にはありません。こんなに大切なイエスの最後のおことばが、ヨハネ福音書の中にだけあって、他の福音書の中にはないということはどういうことなのでしょう。

今私たちは、ヨハネ福音書に記されているこれらのイエスのおことばを、十字架の死を前にしたイエスの、弟子たちへの最後の別れに当たってのおことばとして聴いています。いわばイエスの遺言として聴いています。けれども、ヨハネ福音書の中に響くこれらのおことばは、最後の晩餐の時にイエスが語られたおことばをそのまま筆記したものではないかもしれません。もしそうなら、他の福音書の中にも、これほど大切なイエスのおことばは、当然記されていなければならないはずですが。考えられることは、ヨハネ福音書の作者も、ヨハネ福音書がその中で書かれた最初の教会の信者たちも、私たちと全く同じ立場に立って、これらのイエスのおことばを聴き取っているのではないかということです。

どういうことかと言うと、イエスの十字架の死と復活という出来事を信じた人々の信仰の中で、これらのイエスのおことばは、彼らが信じたイエスの遺言として響いているということです。イエスのこれらのおことばは、復活のイエスと出会い、復活のいのちそのものである聖霊を注ぎ込まれた弟子たちが、その体験を通して初めて聴き取ることが出来たイエスの遺言を伝えているのです。

ヨハネ福音書は、弟子たちの宣教によってイエス・キリストへの信仰に導かれた最初の教会の信者たちのために、これらのイエスのおことばを、十字架の死を前にしたイエスの遺言としてここに記しているのです。その意図は、弟子たちの宣教によってイエスへの信仰に導かれた最初の教会の信者たちに、彼らが信仰によって受け止めていることの全ては、十字架の死を前にしたイエスのこれらのおことばに基づいていることを示すことにあるのです。そうすることによって、ヨハネ福音書の中で十字架の死を前に弟子たちに語られるこれら

のイエスのおことばは、聖書を通してこれらのおことばを聴く全ての時代の信者たちにとって、自分たちの信仰の今を照らすイエスの遺言となったのです。

「わたしは、あなたがたを孤児にはしておかない。あなたがたのところに戻ってくる。しばらくすると世はもうわたしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る。私が生きているので、あなたがたも生きることになる。」今日の福音の中に響くイエスのおことばです。このおことばのとおり、十字架の上に死んで、復活されたイエスは弟子たちのところに戻って来て、復活されたご自分をお示しくださったのです。復活されたイエスに、そのいのちの霊を吹き込んでいただいた弟子たちは、その罪の全てをゆるされ、聖霊に満たされて、復活されたイエスのいのちに結ばれて、イエスを信じる新たないのちを生き始めたのです。

復活されたイエスは父なる神のみもとに昇られ、この世に生きる私たちは、肉の眼をもってそのお姿を見ることは出来なくなりましたが、そのことによって、イエスは過去の歴史の中に消えたのではない。復活されたイエスが弟子たちの中に吹き入れてくださったいのちの息吹、聖霊は、今やその弟子たちの宣教によってイエスへの信仰に導き入れられた私たちの中に、イエスの約束どおり、豊かに息づいている。そのことを、私たちはイエスへの信仰によって生きはじめた、私たちの新しい信仰のいのちの中で経験している。これが、聖霊降臨によって誕生した教会の働きを通して、その教会の信仰の中で洗礼を受けたキリスト者たちの、私たちの今に続く信仰による自己理解です。

先ほども言いましたように、ヨハネ福音書は、洗礼によって教会に伝えられてきたイエス・キリストへの信仰を生きはじめた私たちの今が、私たち全ての者のために十字架に架けられて死んだ神の子イエスに結ばれていることを示そうとしているのです。十字架の死を前にしてイエスが語られたおことばのすべては、私たちが見上げる、十字架上のイエスの私たちへの遺言であることを示そうとしているのです。その十字架のイエスは復活されたお方として、その復活のいのちの息吹である聖霊を通して、今も私たちに語りかけ、私たちのうちに留まり続けてくださるのです。日々の生活を生きる私たちが、私たちのうちにいてくださるイエスと出会うことができるのは、私たちのうちに働いてくださる聖霊が、私たちの心を開いてくださることによってです。聖霊の促しに従って、私たちのうちにいてくださるイエスに心を向けることが出来る時です。そのような聖霊の時を、私たちは祈りにおいて経験しているはずです。特に、私たちのうちに呼びかける聖霊の促しに従って教会に集い、同じ信仰を生きる仲間たちとともに、イエスの祭壇を囲んでミサをささげ、イエスのいのちの体である聖体をこの身にいただく時です。

「かの日には、わたしが父のうちにおり、あなたがたがわたしのうちにおり、わたしもあなたがたのうちにいることが、あなたがたにわかる。」イエスがこのおことばの中で言われている「かの日」とは、聖霊が私たちの心を燃え立たせてくださり、私たちのイエスへの信仰が私たちの中に目覚める日です。私たちの今日が、いつもそのような「かの日」となることを、復活のイエスが御父のもとから私たちもとへ遣わして下さった聖霊に祈り求めたいと思います。

「わたしの掟を受け入れ、それを守る人は、わたしを愛する者である。わたしを愛する人は、わたしの父に愛される。わたしもその人を愛して、その人にわたし自身を現す。」今日の福音の最後のおことばです。

イエスの掟とは、言うまでもなく、イエスが私たちに与えてくださった愛の掟です。それにしても、イエスは何故、私たちが互いに愛し合うことが、イエスが私たちに与える掟であり、命令であると言われるのでしょうか。掟も命令も、シナイの山で旧約の神の民に与えられた契約の恵みのことばです。神の契約の恵みによって神の民とされた人々は、その契約の掟を、神の命令として受け入れることによって、神の民として生きる道を示されたのです。イエスが、わたしの掟と言われるとき、その掟を守る私たちは、イエスの十字架の血によって新たにされた契約の神の民として、イエスに従ういのちの道を見出すことが出来るのです。契約は、その契約によって結ばれた者同士の、特別に親密な関係を意味し、その関係を生み出すものです。イエスがその十字架の血をもって結んでくださった契約を受け入れた私たちに、その契約の掟として、互いに愛し合うことが命じられているのです。何故なら、互いに愛し合うことの難しさと喜びの中で、私たちに注がれている十字架のイエスの愛の深さをより深く知ってゆくことが出来るからです。今日の福音のおことばをより深く私たちのうちに受け入れてゆく恵みを願って、私たちにうちにいてくださるイエスを見つめて今日もこのミサをおささげいたしましょう。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高